
完全なる勝利と永遠の不幸

ヘタレ + ドヘタレ = 超ヘタレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

完全なる勝利と永遠の不幸

【Nコード】

N4624Z

【作者名】

ヘタレ+ドヘタレ=超ヘタレ

【あらすじ】

黒衣の怪物がもたらすのは沈黙。
クリスマスの日に親友を失った男が歩む物語。
彼の勝利は血も流さない、人が死ぬことも無い。
だが、時として残酷な不幸をもたらす。
そんな怪物の物語。

プロローグ（前書き）

プロローグだもんね、語っちゃっていいもんねえ。

俺のは大体ノリの勢いで書かれる作品が多いからね。
過度な期待はしないでね。

クリスマスは中止。

プロローグ

共に語り合う仲間がいたから笑顔でいられた。

共に笑える友達がいたから生きていく希望があった。

友達が消えた時から彼はおかしくなった。

彼はしゃべること無く、抜け殻となり、すべてに対して無関心となった。

きっと、虚空となった彼の頭の中で思い出が浮かんでいるだろう。

親友との思い出だけを……。

黒衣の怪物が司るのは沈黙。

彼の怒りは敵の血を流さない。

もたらすのは永遠の沈黙。

そんな怪物が愛するのは静寂と傍にいる親友だけ。

1 『沈黙を強いる者』

肌寒くなつたせいだろうか。

通っている大学へと歩いていく男がくしゃみをしている姿が目に見えた。

孤独なその姿を見ていた周囲は何も声をかけることなく見ているばかり。

声をかけたところで彼がまともな反応をしてくれるとは思っていなかったからだ。

たつた一人だけ違った。

「日影さん！」

温もりのある缶コーヒーを手に真塩が近づいてくる。

自分の名前を呼ばれても日影彰ひかげあきと人は何も反応を示さず、呆然と歩いていた。

心ここに在らず……。そんな言葉で例えることができる様子でもある。

「日影さん、寒くなつたよ。コーヒーでも飲む？」

「……」

「もう少しで冬だから朝寒いよね。海外研修に向けて新しい服買わないとね」

「……」

笑顔で対応する真塩ましお 奈緒美なのおみの言葉に彼が答えることは無かった。

一人大学に向けて早足になっていくだけ。

取り残されたと感じた真塩が不意に歩いていた足が止まる。

さびしげな表情で日影の背中を見ては立ち尽くしているだけであつた。

日影が向かったのは大学内にある研究所。

その研究所の入り口近くで彼は立ち止まった。

ドアの横には『横峰研究所』と人の苗字がわかるように記されている。

『001 コードネーム 日影彰人 確認』

扉の上にあるスピーカーからそう聞こえてきた。

アナウンスが終わったと途端に自動ドアが開く。

ドアの向こうへと1歩歩こうとした時、日影の姿が音も無く変わっていった。

元の小柄な青年の姿では無い怪物へと変形する。

見えてきたのは肩から腕にかけて漆黒の甲殻。

その甲殻は体全体まで広がり、強靭さが露にされていた。

首元からは灰色の肌が見え、口からは異形な仮面が纏われている。彼が1歩1歩、踏みしめる度に彼を映し出すものがすべて割れていた。

部屋にあつた鏡に微かに写した窓ガラス、細かいものではテレビの画面ですら彼の姿を写した途端、一人で割れた。

「今日も不機嫌だなあ、彰人君」

部屋の椅子に座っていた男 横峰が笑いながらそう言う。

割れた鏡やテレビの破片を素手で掴みながら予め用意されていた袋へと投げ込んでいった。

「また酷い夢をみたかね」

男がいくら聞いても彰人は答えない。

笑うことすらしなかった。

1年前のクリスマスに起きた事件から彼はずっとそのまま。

あの時から心が動いていないことが男にはよくわかった。

その日はホワイト・クリスマスだった。

家族と過ごす者、恋人と過ごす者等様々ではあるが、その日の彰人は高校の頃からの親友達と過ごすことになっていた

どこか安っぽい食べ放題の店でくだらない話を肴に一晩楽しむ。

そうなるはずだった。

「利久！ 正人！」

クリスマス夜の夜、彰人の目の前で行われたのは残酷なリンチだった。そのリンチで親友二人が死んだ。

一人、彰人は無残な姿だが生き残れた。

腕を折られ、体の半分は炎で焼かれた状態で一般の市民によって見つかった。

誰がやったのか犯人達が見つからず、唯一の目撃者である彰人はシヨックで記憶も消え、しゃべることも出来なくなった。

唯一の手がかりは彰人の手にあったキーホルダーだけだった。

「終わりだ。お疲れ、彰人君」

検査は無事に終わった。

いつものことでトラブルなど何も無いが、少しでも変化があるのかないかと横峰はデータを見比べていた。

彼が毎朝検査を受けるのは勿論、怪物となることが出来るから。

それだけでは無い。

彼に宿った能力を日本という国が研究するため。

その中央に彰人が通っている大学『椿文化大学』があり、高校卒業と同時に彼はそこを通うようになった。

どんな能力なのかはいまだ説明されていない。

発火するわけでも光線を出すわけでも無い。

目に見えない力が彼にはあった。

彰人自身がまだ喋れる頃、なぜその怪物の力を得たのかわからないと本人も語っていた。

生まれついでの方だ。

役立てようという考えも無く、力を押さえ込みながら今まで生活してきたという。

特に使い道が無いというのもあった。

大学に招き入れてから2年間。
彼も20近くになるうとしていた。
だが、能力や外見に変化は無かった。
最初の1年間は話すことも出来るから状態を聞くことが出来た。
クリスマス悲劇から研究も一時、中断した。
彼の心境を考えてだったが、国からの要請がうるさいために研究は
続行することに……。

検査が終わった後、彰人は講義に出ようと廊下を歩いていた。

目的の地についたと途端、聞こえてきたのは怒鳴り声と椅子や机が
動いている音。

そんな音を気にすることなく、彼はドアを開いた。
生徒同士が争っていた。

そんな中で彰人が入ったと途端にすべてが静まり変える。

殴り合ってた学生二人が時間が止まったかのように硬直し、周囲に
いた生徒達は彰人を見た途端に後ずさりする。

彼が入ってきただけで講義室の中が急激に変化した。

「おお、日影さん、ちーす」

学生らの中からひよっこり顔を出してきたのは朝話しかけてきた奈
緒美。

朝と変わらない様子で彰人は無視をして空いている席へと歩いてい
った。

一瞬にして静まり返った教室内で生徒達も何事も無かったかのよう
に席へと戻っていく。

喧嘩をしていた学生は互いに平謝りで事を静めた。

一瞬で教室を沈黙させた彰人は何もしていないと言う雰囲気漂わ
せながらテキストを開いていた。

昼休みの時間、一人寂しく過ごす彼がいた。

誰とも話すことなく、悲しい色をした目が遠くを見る。

彼が今何を考えているのか、どんな時間を過ごしているのか。
周囲に誰もが疑問を抱くがどんなに時間がたっても答えが出ること
が無かった。

1 『沈黙を強いる者』（後書き）

書いてて思ったんだ。

ただのぼっちじゃねえか

2 思い出は自宅に、願いは海の方へ

「金溜まったら、海外いきてえな」

「酒のみてえなあ。フランスの酒って美味そうだ」

友人二人が夜な夜なそう呟いていた。

とくにやる事が無いと彰人も含んだ3人は理想ばかりを語るようになる。

フランスの旅行も一つの理想。

「行きたいな」

彰人も不意に呟いてしまった。

そして利久がパソコンを立ち上げては早速インターネットを開いた。旅行サイトを探しては目的のページを探していく

「いい旅行プランがあるで。しかも安い。行こうか、来年の春にでもさ」

「彰人の金が無いだろ。どうするんだよ、彰人」

正人の不安に対して彰人は笑っては「大丈夫」だと言う。

「科学者や国から金せびればいくらでもいけるさ。研究目的って言えばいくらでも援助してくれる」

「罰当たりじゃねえか。まあ、当然だろうな」

「研究室で馬鹿みたいに怪物、怪物と言われて……彰人は辛くないのか」

ずっと研究の対象として友人の体がいじられていくことが耐えられなかった。

高校の頃からの親友が怪物のように扱われ、世間からも嫌悪され続けてきて、助けられないことが辛かった。

正人も利久も小さくため息をついてしまった。

「今日は俺が飯だったな。任せろよ」

ルームシェアの一人として役割を果たそうと彰人は立ち上がった。

フランス旅行の計画を練ろうとしている利久達のために彼が考えて

いたのは赤ワインを使った肉料理だった。

この日も彼は赤ワインを使った肉料理を作っていた。無表情、無言で手際よく調理をしていく。お皿も3人分。

彼が誰のためにつくっているのか。

テーブルに座っている横峰と奈緒美はわかっていた。目の前に出された香ばしい香りを漂わせている肉料理はきっと、今は亡き友人のために作られているのだと……。過去に魂を残した彼はこうやって毎日、同じ繰り返しをしていた。

親友の亡き後、住みかとして使っていた家は彰人一人で住むことになった。

遺品はすべて家族の元に戻され、残ったのは彰人一人だけ。時々、奈緒美と横峰が様子を見にきている。

すでに仕事をしていた二人の苦労話を聞くことが出来なくなり、また二人とゲームをしたり、くだらない話で笑いあうことが出来なくなり、彰人の心を消えかけているのがわかった。

「先生……どうすりゃいいんですか」

「知るか。とりあえず、今度の海外旅行で何か変わるかも。まあ、楽しみにしとけばいいや」

「……日影さん」

奈緒美が見た先には彰人が赤ワインをボトルで飲んでいる光景があった。

未成年の飲酒ではあるが、彼女は止めることなく見守る。

どんなに酒を飲んでもどんなに体に悪い影響が無い。

彰人の特異な体質を知っていたために止めることはしなかった。

今日、奈緒美と横峰が来たのは二日後に控えた海外研修に向けての準備のため。

彰人の念願であるフランスへの訪問の準備を手伝うために来ている。声をかければ自分で支度することが出来るが、不安があるために彼の家に訪れていた。

ここを離れて急激に変化が変わればどうなるか。

認知症では無い。言葉をかけて頼めば理解して行動をしてくれる。

今回の大規模な計画『旅行に行く』ということ伝えてらどうなるか。

パニックにならないか不安になってしまった。

奈緒美がそう不安を抱いている中……。

「彰人君、フランス旅行に行こうか」

「ちよ、おーい！」

奈緒美の不安をよそに横峰はためらうことなく彰人に言った。

「親友との夢、叶えたいだろ？いつも国から怪物扱いされてるあんたに俺からのプレゼントだ」

「……」

彰人は目を輝かせている。

いつも死んだ目をしている彼が途端にフランスの話をしたら心を無くす前の目に戻っていた。

今回のフランス旅行は国からの慈悲でも横峰の善意でも無い。

ただの研修旅行のようなものだった。

勿論、学校の行事の一つである。

彰人がフランス旅行の行事を忘れていただけ……。

横峰の分析を聞いて奈緒美もやっと納得した。

「昔のことを思い出してフラッシュバックが起きるか不安がありました」

「奈緒美ちゃんがそう思うのも無理ない。俺は生物学の研究しかしてないから、正直自身無かったよ」

「でも、よく日影さんを口説けましたね」

「口説くって……他に言い方無いのか。まあ、そうだな」

彰人が出してくれたコーヒーを一口。

そして、横峰は続けた。

「臭いことを言えば、思い出ばかりに引きこもってるのも心に良く無いと思って……。ただ手を差し伸べただけだよ」

「消臭剤ぶつかるほどの臭さじゃなくて安心しました」

「……そりゃ、良かった」

消臭剤を持ってきた奈緒美を見て、横峰は少し安心した表情を浮かべた。

かっこいいことを言えば、ラベンダーが体にこびりついていたのだろう。

苦笑いで彼はまたコーヒーのカップを口元に持ってくる。

「臭くないのも悪く無い」

フランスのホテルでは近く来訪する日本の学生のために準備が行われていた。

料理から部屋の掃除まで丁寧に行っていく。

外で作業していた作業員がふと、空を見た。

「雪？」

夜空から降りだしたのは白い雪。

天気予報では降り出すと言った話は無かった。

不思議だなと感じた作業員はずっと夜空を仰ぎ見ていた。

2 思い出は自宅に、願いは海に向かった（後書き）

書いてて思った

俺、臭いわ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4624z/>

完全なる勝利と永遠の不幸

2011年12月18日07時45分発行